最終話　親譲り

「似てるのよ。あなたたち」
大学進学のための引越しも間近に迫った夜、唐突に母が言った。
「あなたたち」の意味を測りかねて、私はその真意を母に尋ねた。

「最近お父さんと話せてないでしょ」
「そうだけど、向こうも話しかけてこないから」鋭く核心を突く母の言葉に、私はせめてもの抵抗を試みる。

「最近あなた、忙しくしてたから気遣ってるのよ。でもね、私もあなたのおじいちゃんと、もっと話しておけばよかったって思うこと、時々あるのよ」母がほんの少し目を伏せて言った気がした。最近、父と話をしていない。その自覚はあった。でも、なんとなくそのままにしてしまっていた。

「だからこれは、元娘からの忠告。つまんない意地なんて張ってないで、早く話しかけてあげて。きっとあのひと、待ってるから」母の言葉に私は静かに頷いた。

翌朝私は、父に話しかけるきっかけを探していた。父と話したいことを思い浮かべてみる。実家の子ども部屋より狭い新居のこと。大学でサイクリング部に入ろうと思っていること。半年前、母に内緒で買ってくれると言っていた入学祝の自転車のこと。

でも今更そういう話題を父に振れるほど、今の私は幼くない。そうだ。今からスマホでする、転出届について聞いてみよう。父は転勤族だし、そのテーマなら私から話しかけても違和感はないだろう。

似てるのよ。あなたたち。母の言葉に私は苦笑する。おそらく私は、娘と話すきっかけを掴めない父にも、かつて娘だった意地っ張りな母にも似ているのだろう。だとすると、両親譲りの厄介な性格は、たぶん一生直らないし、私に直す気もないのだろう。

「ねえ、世帯主ってお父さんのこと？」
私はスマホの画面を見つめて、何気ない風を装ってそう呟いてみた。